

青森県津軽方言の自発形式¹

大槻知世 (東京大学大学院博士課程/日本学術振興会特別研究員)

1 はじめに

津軽方言の「サル」は動詞に接続して主に自発を表す。北海道方言 (佐々木 2007) や盛岡市方言 (竹田 1998) 同様、津軽方言の調査でも自発(1) - (2)、一種の受身(3) - (4)、可能(5) - (6)の用法が確認された。

- | | |
|---|---|
| (1) ワラワサル「つい笑ってしまう」
笑う.未然形-サル ² | (2) センタグモノ カワガサル「洗濯物が乾く」
洗濯物 乾く.未然形-サル |
| (3) ホン オガサッテラ「本が置かれている」
本 置く.未然形-サル-継続 | (4) ネゴ ダガサッテラ「猫が抱かれている」
猫 抱く.未然形-サル-継続 |
| (5) ト アガサンネ「ドアが開けられない」
扉 開く.未然形-サル-否定 | (6) コノ ペン イグ カガサル「このペンはよく書ける」
この ペン よく 書く.未然形-サル |

この「サル」の起源についてはほとんど知られておらず、現時点では管見の限り直接的な証拠と言える現象や資料は見当たらない。本発表では、最も蓋然性の高いと思われる「サル」の由来を提案する。

2 対象言語

本発表の対象とする言語は、青森県西部の津軽地方で約 70 万人に話されている津軽方言である。東條操 (1938 : 28 - 45) によると、当方言は東部方言に分類され、東北方言のうちの北奥方言に属する。

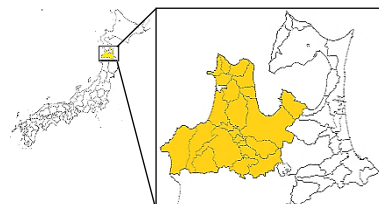


図 1 青森県津軽地方

3 調査について

本発表のデータは、2014 年 7 - 8 月に発表者が行った面談調査、自然談話の観察、文献調査、および 11 月の追加調査による。面談調査は、主に、現代日本語共通語 (以下、共通語) の例文を提示し方言に訳してもらおう方法 (例文翻訳式) に拠った。調査地は青森市、弘前市、平川市、東津軽郡 今別町である。インフォーマントに関する情報は、青森市 : 60 歳代女性、40 歳代女性、30 歳代男性。弘前市 : 60 歳代女性 4 名、40 歳代男性 2 名、40 歳代女性 1 名。平川市 : 80 歳代女性 2 名。今別町 : 90 歳代男性 1 名、80 歳代女性 1 名。生え抜きの方ばかりではないが、いずれも言語形成地は津軽地方である。

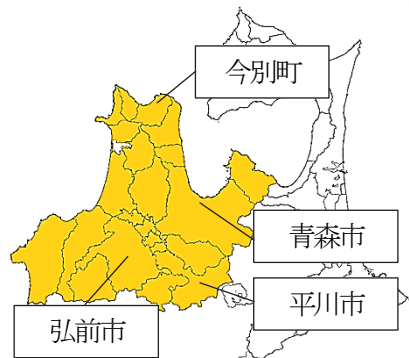


図 2 調査地

4 津軽方言の「サル」

本節では先の三用法に加え、二用法を新たに報告する。なお、「サル」は次の通り四段活用である。

表 1 「サル」の活用

動詞\活用形	未然 (~ネ[否定])	連用 (~タ [過去]・ ~ス [ます])	終止	連体 (~ズギ「時」)	仮定 (~バ)
「読む」 (未然形接続)	ヨマサ (ン) ヨマサラ	ヨマサッ ヨマサリ	ヨマサル	ヨマサル	ヨマサレ

活用表のうち、連用形「サリ」は他の活用形より頻度が低い。命令形は共時的には未確認である。

¹ 本稿は 2014 年度日本言語学会秋季大会での口頭発表原稿 (11 月 15 日於愛媛大学) を、質疑やご意見を受け一部改めたものである。

² 本来例文に音韻的表記の行を設けていた。しかし、形態音韻論的分析に再考の余地があるため、本稿ではこの行を措く。

4.1 自発

自発用法は、どの調査地においても確認された。用法の使用が確認されたことを地図中に黒丸で示す。

- (7) ナンカイ ヨンデモ ナガサル
何回 読む.連用形-ても 泣く.未然形-サル
「何回読んでも泣いてしまう」
- (8) ヘナガ オササッタ
背中 押す.未然形-サル-過去
「背中を押してしまった」[狭い空間にすし詰め状態で、他人の背中を]
- (9) キョ テンキ イハンデ センタグモノ スク³ カワガサル
今日天気 良い=理由 洗濯物 すぐ 乾く.未然形-サル
「今日は天気が良いので、洗濯物がすぐに乾く」

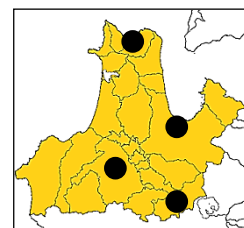


図 3 自発用法の分布

一口に自発と言っても、(7) - (8)は行為者の意志に関わりなく、行為者が何らかの行為を表す用法で、(9)は事象がひとりでに生じることを表す用法である。前者は「偶発的行為用法」(加藤 2000 : 10)「狭義自発」(渋谷 2006 : 51)とされ、後者は「自然発生用法」(加藤 2000 : 10)「自然生起(広義自発)」(渋谷 2006 : 54)とされる。津軽方言では二つの差異を主語の有生性の傾向として指摘しうが、形態統語的には明確な違いを認め難い。本発表では狭義自発も自然生起も便宜的に自発と一括する。

4.2 受身(状態受身を含む)

受身用法は、今別町以外で確認された。今別町では受身用法は無いとの明確な答えがあり、調査中の談話観察の限りでも確認されなかった。

- (10) カミニ ナンガ カガサッテラ
紙=所格 何か 書く.未然形-サル-継続
「紙に何か書かれている」
- (11) フトン ホササッテラ
布団 干す.未然形-サル-継続
「布団が干してある」
- (12) ネゴ カガノ ウデサ ダガサッテラ
猫 妻=所有格 腕=所格 抱く.未然形-サル-継続
「猫が妻の腕に抱かれている」

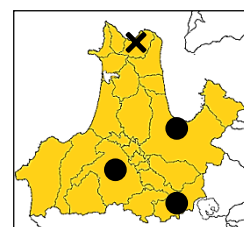


図 4 受身用法の分布

図 4 の×印は用法の不使用を表す。なお、「太郎は花子に殴られた」のように主語が有情物で他動性の高い他動詞からつくる文を典型的な受身とすれば、本稿の「受身用法」は典型的な受身とはやや異なる。当方言の典型的な受身は「(ラ)エル」(共通語「(ら)れる」)で表し、これが受身表現一般を担う。

4.3 可能

可能用法は全地点で確認できた。

- (13) コノ ペン イグ カガサル
この ペン よく 書く.未然形-サル
「このペンはよく書ける」

³ 凡例：カ行の右肩に丸で、いわゆる鼻濁音(厳密には軟口蓋鼻音[ŋ])を表す。

- (14) クレハンデ シンブン ヨマサンネ
 暗い=理由 新聞 読む.未然形-サル-否定
 「(部屋が) 暗いので新聞を (読もうとしても) 読めない」
- (15) デンキノ スイッチ カデフテ オササンネ
 電気=所有格 スイッチ 固くて 押す.未然形-サル-否定
 「電気 (=灯り) のスイッチが固くて (カ一杯押しても) 押せない」

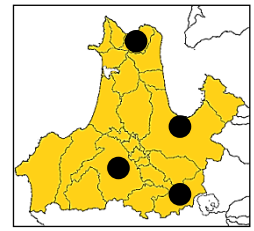


図 5 可能用法の分布

(13)は一種の属性叙述で、無生物を主語にとることが多い。今別町の話者からは、(14) - (15)の「サル」が状況可能（動詞が表す動作の実行可否が、動作主の能力ではなく外的要因に左右される）であるとの内省を得た。状況可能は肯定文でも用いることができる⁴。

また、可能を表す形式には他に(16)「動詞未然形+ (ラ) エル」、(17)「動詞終止形+ ニ イ」もある。

- (16) デンキノ スイッチ カデフテ オサエネ ※訳は(15)と同様のため割愛
 電気=所有格 スイッチ 固くて 押す.未然形-エル-否定
- (17) アガルイハンデ シンブン ヨムニ イ
 明るい=理由 新聞 読む.連体形=目的? 良い
 「(部屋が) 明るいので、新聞を読むことができる」

可能を表す三形式の機能分担は次の表 2 のようになる。「(ラ) エル」は可能一般を表す。

表 2 可能を表す諸形式の機能分担

可能の種類\形式	サル	(ラ)エル	～ニ イ
能力可能	×	○	△
状況可能	○	○	○

かつては「～ニ イ」は状況可能を表したが、今は能力可能を表す場合もあり、混用が見られる。

4.4 尊敬

弘前市と平川市では⁵、尊敬と思しき「サル」の用法⁶も認められた⁷。

- (18) センセモ コラサル
 先生=も 来る.未然形-サル
 「先生もおいでになる」

⁴ 例(15)の場合外的要因が解消される（例えば隙間に詰まった埃が取り除かれる）と、次のように言える。

(一) ヤット オササッタジャ
 やっと 押す.未然形-サル-過去-終助詞
 「やっと押せたよ」

⁵ 弘前市の 60 歳代女性 4 名、平川市の 80 歳代女性 2 名から使用例を得た。平川市の 2 名は弘前市の女学校で教育を受けた。ちなみに、弘前市の東隣の板柳町でも調査したところ、60 歳代男性が尊敬の「サル」を知ってはいたものの、使用語彙ではなかった。弘前市、平川市とそれ以外の市町のインフォーマントの年代や性別といった位相が異なることはもちろん留意する必要がある。

⁶ 一応は既に此島（1968：126）に記述があり、「自発のサルと本来は一つのものであったかと思われる」とある。

⁷ 文献調査でも、万延元年（1860 年）の成立とされ、近世津軽方言の資料とみとめられる『津軽道中譚』（『御国巡覧滑稽噺盡戯 [おくにめぐりこっけいいうそつきげ]』とも）において、尊敬用法と思しき「サル」が確認された。さらに、『津軽道中譚』においては、「サル」と同じ環境に現れて尊敬の意味を表わす「シャル」という形式も見られた。

(二) これへ泊らっされ。(54 頁：第三卷二「十和田の御手洗池に参共を打」)
 (三) 山を廻つて見物さつされ。(148 頁：第六卷五「湯の嶋に喜次鮑を突んとす」)
 (四) ゆるりと支度さつしゅれ。(95 頁：第四卷六「黒森の占よくの当す」)
 (五) 匂ひ油なら青森西沢へいがつしゅれ。(124 頁：第五卷六「関門を出て策石に海栗を求む」)

これらは全八巻に約 13 例あり、全て会話文において津軽の人々が江戸からの旅人に対して発したものである。尊敬の「シャル」は石川県（能登、珠洲）、富山県、岐阜県（飛騨）や福岡県など各地の方言に存在し、方言間借用かもしれない。

- (19) オメノ センセ キレンダ ジ カガサルナ
 2単=属格 先生 綺麗な 字 書く.未然形-サル-終助詞
 「お前の先生は綺麗な字をお書きになるね」[自分の子供に、連絡簿にある担任の肉筆を見ながら]

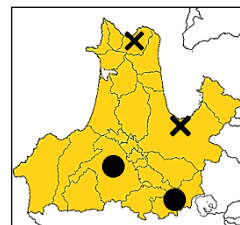


図 6 尊敬用法の分布

すなわち、弘前市周辺の地域では、自発その他の用法と尊敬用法が同一の形式で表され、文脈に応じて使い分けがなされていると言える。尊敬用法の「サル」は、尊敬の対象となる動作主（Xとする）の動作について、X以外の聞き手に話す際に用いる。現段階では、往来に関わる動詞と、例(19)の「担任の肉筆」のように、Xの動作性が明らかに認められる文脈での用例を得ている⁸。

4.5 使役受身

今別町では、使役受身と見られる「サル」が確認された。

- (20) オミソガニ カイダシ イガサッタ
 大晦日=所格 買い出し 行く.未然形-サル-過去
 「大晦日に買い出しに行かされた」
- (21) マゴニカッテ クワシ クワサッタ
 孫=によって 菓子 買う.未然形-サル-過去
 「孫に（ねだられて）お菓子を買わせられた」
- (22) タイフ キタハネ モドラサッタ
 台風 来る.連用形-過去-理由 帰る.未然形-サル-過去
 「台風が来てしまったので（家に）帰らせられた」

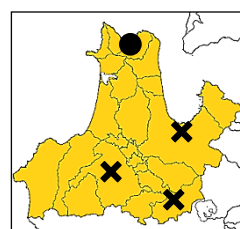


図 7 使役受身用法の分布

話者の内省によると、「その場の空気に逆らえず、その行為をする場合」に用いる。以上の「サル」の用法と調査地ごとの分布をまとめると、次のようになる。

表 3 今回確認した「サル」の用法と調査地ごとの分布

用法\調査地	弘前	平川	今別	青森
自 発	○	○	○	○
受 身	○	○	×	○
可 能	○	○	○	○
尊 敬	○	○	×	×
使役受身	×	×	○	×

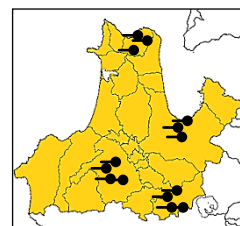


図 8 各用法の分布

● : 上から反時計回りに自発・受身・可能・尊敬・使役受身

表 3 の白丸は当該用法が当該地点で確認されたことを表す。×印はその用法が使用されないと認められたことを表す。図 8 では使用が確認された用法のみ明記している。

5 他地方の方言における自発相当形式

本稿で扱う自発の「サル」相当の形式は、北海道から静岡県までの各地の方言に広く見られる⁹。こ

⁸ なお、「*先生のお車が来らサル」のように、共通語では主語（ここでは「お車」）が尊敬の対象（「先生」と同一化・擬人化され尊敬表現を用いる場合であっても、津軽方言においては尊敬の「サル」を用いることはできない。

⁹ 九州にも「乗サル」(cf.「乗る」)のような自発表現があるが、非生産的で語彙的に存するのみである（下地理則先生のご教示）。

ここでは、北海道方言（山崎 1994¹⁰、佐々木 2007¹¹）、盛岡市方言（竹田 1998）、秋田県北部方言（日高 2000¹²）、山形市方言（森山・渋谷 1988、渋谷 2006）、福島方言（白岩 2012¹³）、宇都宮方言（加藤 2000、活用表は大橋 1963 : 322¹⁴）、静岡県大井川流域方言（中田 1981¹⁵）を取り上げる¹⁶。

形態的には、北海道、盛岡市、秋田県北部、宇都宮では、津軽方言と同様の「サル」、形態音韻論的な表記では-(r)asar、が確認された。これらは概ね津軽方言と同じ四段型の活用（表 1 を参照）で、動詞未然形に接続する。

山形市、福島では-(r)ar が確認された。山形市は記述が無く活用、接続ともに不明である。福島の-(r)ar は四段型の活用であり、動詞未然形に接続すると思われる（白岩 2012 : 42 - 43）。

静岡県大井川上流域の井川方言では、「ラーサル」「ラーサル」「サーサル」「サーサル」といった自由変異がある（中田 1981 : (2)）。右の図 9 には、紙幅の都合上これらをまとめて-{r, s}a:sa(:)r と表すことにした。なお、「…サル」が「…サル」になる条件は不明である¹⁷。井川方言でも活用は四段型である。接続は動詞未然形と思われるが不明である。

意味的には、小異はあるものの、概ねどの形式も自発、受身、状況可能の用法を有する。但し、福島方言の-(r)ar は自発としては生産的でなく、本稿における一種の「受身」¹⁸に専ら用いる（白岩 2012 : 40）。

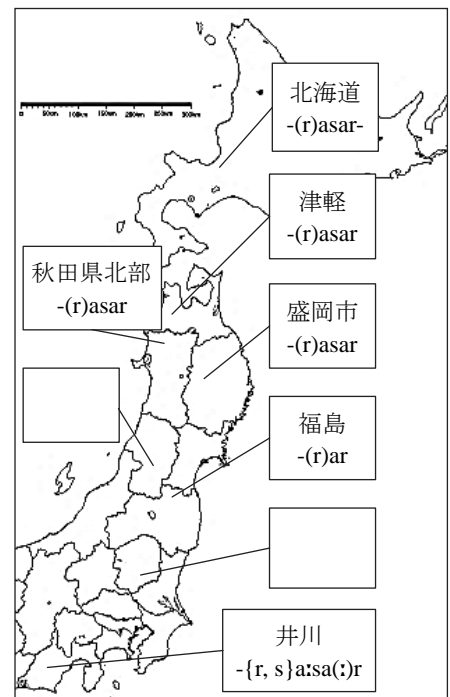


図 9 東日本自発形式の分布

6 「サル」の起源の可能性

「サル」の由来を考察する場合、方言における独自の発生と考えるよりも、まずは中央語（かつて京阪地方を中心に用いられた標準語とする）との関係を考慮する必要があると考える。「サル」の用法に自発・受身・可能と、一部地点ではあるが尊敬が見られることから、自発・受身・可能・尊敬の助動詞「らる」¹⁹との関連がまず考えられる。次に、「らる」が「サル」の基盤であるとして、前部の s 音要素は何に由来しうかが問題となる。本稿では、使役・尊敬の助動詞「す」の未然形「せ」を提案したい。

「す」と「らる」は未然形接続で、これらから成る「せらる」も未然形接続になると考えられる。津軽の「サル」が未然形接続である事実と一致する。活用は、「らる」が下二段型であるのに対して、「サル」は四段型、と異なっている。これは、津軽方言の体系に入り、多数派と思われる四段活用²⁰に平準

¹⁰ 山崎 (1994) のインフォーマントは札幌市生え抜き（年代、性別は記述が無く不明）。

¹¹ 佐々木 (2007) は札幌市、旭川市で大学生を中心に調査を行っている。

¹² 秋田県北で青森と接する大館市や能代市の県北方言と、青森・岩手と接する内陸部の鹿角方言をこう称する（日高 2000 : 105）。

¹³ 福島市を中心とした福島県北地方の方言を福島方言と称し、白岩の内省に基づき記述している（白岩 2012 : 35）。

¹⁴ 大橋は宇都宮だけでなく栃木県の方言を対象としている。管見の限り、加藤と大橋の間で動詞活用に相違は無い。

¹⁵ 静岡県中部の大井川上流にある静岡市葵区井川の井川方言を中心的に記述しつつ、中流の中川根方言、下流の金谷方言にも言及している。本稿では井川方言を取り上げてまとめる。

¹⁶ この他、岩手県大船渡市や陸前高田市を中心に話されるケセン語にも、自発の「サル」がある（新沼 2014）。

¹⁷ 『サーサル』よりも『サル』の方が多く (...)、一般動詞などの場合ラーサルの方がサーサルより一般的である（中田 1981 : (2)）

¹⁸ 白岩は「受身」ではなく「逆使役」という用語を採っている（白岩 2012 : 40）。逆使役とは、「他動詞から自動詞を派生する方法の一つで、他動詞主語が削除され他動詞目的語が自動詞主語に対応する場合を指す」（佐々木 2007 : 259）

(六) x (=削除) 校庭に 大きな丸が 描かサツてる (佐々木 2007:261(4a)を一部カナ書きに変更)
cf. [他動詞主語] が 校庭に 大きな丸を 描いている

この逆使役は、本稿の受身や、自発の一部（例(9)のような自然発生用法）と重なる。新たな用語を採用する際の分類や定義に紙幅を費やすことを避けて、本稿では逆使役を導入しなかった。

¹⁹ 凡例：中央語や共通語の形態素はひらがな表記、方言はカタカナ表記とする。

²⁰ 佐藤 (2003 : 56 - 219) に挙げられている動詞延べ 460 のうち、四段活用動詞は 251 と、55%を占める。なお、挙げられている動詞は南方方言のものであるが、津軽方言と音形および活用が同じものに限って数え上げた。

化 (leveling) されたものと考えることができる。

機能的には、使役を表す「す」と受身を表す「らる」が融合することに疑問が生じうる。しかし、4.5 節にある通り、一地点のみではあるものの「サル」で使役受身相当の意味を表す例が確認されている。「す」と「らる」が一語化し始める萌芽の段階を残していると見ることができる。さらに、使役と受身の間には親和性がある。Washio (1993 : 68) の一般化では、支配の及ぶ方向が「もの (causer) から出来事 (causing event) へ」であるものが使役、影響の及ぶ方向が「出来事 (affecting event) からもの (affectee) へ」であるものが受身である。使役と受身は方向が異なるのみで並行的な関係にある。このため、連想によって「す」と「らる」が結び付けられ、伝播するに伴って一語に固着するに至った可能性がある。大橋 (1963 : 326) も、栃木県の「サル」の由来の一つとして「せらる」が考えられると述べている。栃木県の「サル」に使役受身の用法があることを記し、「自分の意に反してあるできごとがおこるといふ点を考えると、述べる方の側から言えば『～させられる』わけである」と結んでいる (大橋 1963 : 327)。

7 まとめ

本発表では、まず津軽方言の「サル」の用法と分布、次に他方言の「サル」相当の形式と用法を見た。そして、津軽の「サル」の特徴と用法のみに基づいてではあるが、その起源を提案した。「サル」には自発・受身・可能の他にも尊敬と使役受身があり、地点により用法の範囲に差があることが分かった。また、「サル」の由来をまず中央語に求め、「せらる」(す+らる) が有望であると提案した。両者は形態統語的、意味的に共通点が多く、連続性を比較的自然的に説明することができる。

参考文献

- 大橋勝男 (1963) 「栃木県における助動詞『さる』」『栃木県高校国研国語』3. 84 - 92.
- 加藤昌彦 (2000) 「宇都宮方言におけるいわゆる自発を表す形式の意味的および形態統語的特徴」『国立民族学博物館研究報告』25 巻1 号. 1 - 56.
- 此島正年 (1968) 『青森県の方言』弘前 : 津軽書房.
- 佐々木冠 (2007) 「北海道方言における形態的逆使役の成立条件」角田三枝・佐々木冠・塩谷亨編『他動性の通言語的研究』259 - 270. 東京 : くろしお出版.
- 佐藤和之 (2003) 「辞典 南部方言」平山輝男編『青森県のことば』日本のことばシリーズ2. 56 - 219 東京 : 明治書院.
- 渋谷勝己 (2006) 「第2章 自発・可能」小林隆・佐々木冠・渋谷勝己・工藤真由美・井上優・日高水穂編『方言の文法』シリーズ方言学2. 47 - 92. 東京 : 岩波書店.
- 白岩広行 (2012) 「福島方言の自発表現」『阪大日本語研究』24. 35 - 53.
- 竹田晃子 (1998) 「岩手県盛岡市方言におけるサル形式の意味的特徴」『国語学研究』37. 44(23) - 33(34).
- 東條操 (1938) 『方言と方言学』東京 : 春陽堂書店.
- 中田敏夫 (1981) 「静岡県の大井川流域方言におけるサル形自動詞」『都大論究』18. (1) - (13).
- 新沼史和 (2014) 「ケセン語におけるサル表現と ar 自動詞」研究発表会「自動詞化の通言語的研究」(9月27日於札幌学院大学) 配布資料
- 日高水穂 (2000) 「秋田方言の文法」『秋田のことば』74 - 132. 秋田 : 無明舎出版.
- 森山卓郎・渋谷勝己 (1988) 「いわゆる自発について—山形市方言を中心に—」『国語学』152. (47) - (59).
- 山崎哲永 (1994) 「北海道方言における自発の助動詞-rasaru の用法とその意味分析」『北海道方言研究会 20 周年記念論文集 ことばの世界』227 - 237.
- Washio, Ryuichi (1993) When Causatives mean Passive: A Cross-Linguistic Perspective. *Journal of East Asian Linguistics*, 2. 45-90.
- 調査資料・引用文献
- 一瓢舎半升 (1860) 『津軽道中譚』(1956年に青森県文化財保護協会が発行した、みちのく双書第二集に拠った。同書は弘前図書館本を底本とし、写本の誤りは八木橋武美氏所蔵の八木橋本を参考に直された)